大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ぷらっとシネマ　戦争直後のヒロヒトを描く『太陽』（A・ソクーロフ監督）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15457

萩原弘子

戦争直後のヒロヒトを描く――『太　陽』（A・ソクーロフ監督）

1945年8月、広島と長崎に「新型爆弾」が落とされ、「玉音放送」で戦争の終わりが告げられた。天皇ヒロヒトがマッカーサーに会ったのは、それから1ヵ月ほど後のことだ。A・ソクーロフ監督の新作『太陽』は、その会見前後のヒロヒトの行動と心理を描いている。『モレク神』（1999年）でヒットラーを、『牡牛座』（2000年）でレーニンを描いたソクーロフによる、権力者シリーズ3作目である。ロシア人が、オリエンタリズムも神秘化もなしで日本を描いているのはみごとだ。ハリウッド製のゲイシャ映画などとは違って、知的繊細さを感じさせる。

まもなく占領軍が東京にやってくるという時期、天皇ヒロヒトの日課の淡々とした描写から映画は始まる。御前会議、海洋生物学研究など、天皇の日常はそれまでと変わらないように見える。しかし、実はなにもかもが変わったことを彼こそは知っている。マッカーサーとの2度の会見、米兵たちによる写真撮影など、「現人神」であればしないことだ。かつて神であった天皇ヒロヒトは、「人間」となる決意を皇后に告げる。ソクーロフらしい灰色に曇るスクリーンで、イッセー尾形（ヒロヒト）が抑制のきいた渾身の演技で、日本戦後史の重要な転回点となった数日間を表現する。

雑誌『新潮』10月号に、ソクーロフのインタビューが掲載されている。そこで自作を語る彼が、ヒロヒトを、苦悩の果てに現人神としての権限を捨て、国民を救う決断をする人間的指導者として描いた旨の発言をしていて、正直のところ当惑させられる。しかし同時に、天皇の神聖さは歴史的に形成されたものだから、天皇自身には放棄できないともソクーロフは言っている。だから、天皇の「人間宣言」が日本人の生活を精神的、政治的に変えたわけではないという彼の発言を見ると、天皇制問題の核心に迫る省察を感じる。

実際、イッセー尾形が具現化しているのは、「人間宣言」を決意するヒロヒトの「人間性」ではないと私は見た。国民を救うためには自分が神格を捨てて「人間宣言」をする、それを大決断と思いなすヒロヒトの、徹底して希薄な現実感覚を、尾形が迫真の演技で見せてくれる。

1945年秋、皇居の外で人々の生活がどれほどの苦労に満ちていたか。日本が始めた戦争のせいで、広くアジアの人々がどんな苦境を強いられたか。どれほどの数の人間が、「天皇のために」死んだり、殺されたりしたか。自分でボタンをかけることもない、ドアを閉めることもないヒロヒトが、どんなレベルのものであれ、人々の苦しみをリアルに想像することはおよそない。尾形のヒロヒトは、鑑賞者にそのことを確信させる。このあたりが、ソクーロフの演出に沿った演技なのか、監督の演出意図を越えて俳優尾形が自身の考えを表現したものかはわからない。「玉音放送」の録音技師が自決したことを告げられて、「あ、そう」と返すヒロヒトの、底なしの酷薄さを伝える尾形の演技の比類なさ！とにかくこの映画が、尾形なしでは成立しなかったのはまちがいない。

史実の描写としてこの映画で重要なのが、この時期のヒロヒトにアメリカへのすり寄りがあったことを伝える場面だろう。マッカーサーに英語で話そうとしたときは、天皇の威厳を案じる日系アメリカ人通訳から日本語で話すよう忠告されるほどだ。物見高い米兵たちの写真撮影の求めにも、侍従長の反対をおしきって積極的に応じている。「人間」に降格してでも、とにかく天皇でありつづけるために、ヒロヒトは行動した。翌1946年5月から始まる東京裁判では、ヒロヒト訴追を主張する連合国もあったが、結局それを抑えこんで天皇制は維持された。戦後世界での日本の使い途を考えていたアメリカの意向である。1945年のヒロヒトにとって、マッカーサーと意思疎通しておくことはなんとしても必要だった。

意欲作であり、サンクト・ペテルブルク映画祭グランプリも受賞したが、日本公開の予定はまだない。尾形の演技が天皇を侮辱していると受け取られかねないし、マッカーサー会見と「人間宣言」に焦点を当てたことを批判するむきもあるだろう。その他あれこれが心配で、上映が決まらないらしい。日本が、敗戦を機に、戦争に至るまでの道程を反省し、国民動員に重要な役割を果たした天皇制を廃止して、新しい国として出発する可能性が1945年秋にはまだあった。この映画が日本の各所で上映されて、そのことを私たちが議論する日は来ないままに終わるのだろうか。この国の閉塞状況はどこまで極まっていくのだろう。

（2005年、ロシア映画、115分）